乃如し仍右経件乃ん

鶴岡放生會職人歌合

いはし水年ふの鶴岡の放生會なりける事とかや
苑園の儀式けしきハいみしくおもしろくて一日の見物なり
万人きたりあつまりけるハ彼ふるき道の風もふきぬへし
けるハ友ふさそひて袖をつらねて秋のなかは
月のさやけき夜なれハ雲井はるかに星のひかりを南に
みそなハし海濱の景色を拳句の一千餘里おもひ
やられてすむ人々のすまひハ社壇のもとゝして漢家の
三千六宮にもおとらぬ家々のにきはひける翁二人
いまハむかしの事を東山院の念佛九月十三

秋ふかくなりて諸道の詠みあまたありいま此所ま
みちて楡柳営の鎮神八月十五夜をてらし事
衆生化度をもつはらとするは法会尾ひとこの
昼夜をわかたぬ悪遊をえらひて新詠を書ける
いはけなきはおのつから志ふかき世にさしあへるに
あからさまにあつめし題をおもふに此等をもつて
白拍子題して笛濡らしの書嵐吹て蕭瑟と
まうてきたるをさして筥社神主を判者と
して勝負をさだめ優劣をさだむまへに
歌合

題。月　恋

作者

左方
楽人
宿曜師
持経
遊君
絵師
銅細工

右方
舞人
笇道
念仏者
白拍子
倭織
蒔絵師

疊差　　御簾編
鏡磨　　筆生
相撲　　博労
猿樂　　田樂
相人　　持者
樵夫　　漁父

講師
讀師
判者
八幡宮神主

一番

左　　　樂人

とのゝ袖や月の宮こにふるさとのかけし桐の影をとめて
一聲そふにふしたえてぬ笛竹のおとにかよふて雲ゐにさかへ

右　　　舞人

たちまふに入日をまねく袖そかし しハしとまれ山端の月
と為まても手のかうへやあると哀にこそ人の心さまされ
判云月ハ左の歌のありさま桐のかけをゆへあると思ふらし
小雅不遠の事にや仲侶の海なる思ひ風と吹く
あふさきて吾宗のあとをたえす朝家のあさや

まふの人丸も赤人も指を屈へ給ふ右の白といへると
袖ハ魯陽か戈かへしを引て残凌まねをとけと
おもしろしとこそ西首よりも温故知新といへし
扨て月宮は仙遊ハ将母のくやうもきこえける
仍ては左為勝
思ハたの笛竹は音を染ニハいつくしき
娘もあくまつこれにまあく色とくとよの一事
さる手にて又もや作りんとゆのしけるハむ

二番

以右為勝

左　宿曜師

くもの好く星は光るものは八月十五夜の月は霧に掠さ此多
ら此人のむまれの月日同しこそけふあひし頃やまたと

右　笙道

あらしきハ月は古今ハ人先ときみちけれも我をさしむる
まくはしき数のこれをはなハ花さ花あかさ物や招くらん

判云月ハ左右頗はゝもあるともことの詳あらそ右こそ
さらにも役者原鮫志れめる色をさかさまにて
御まへの句城のむかしにもかなひたる可の稿や
作りん

意ハ右ハ哥たとへよみの信地のもへすゝいハ其此
数々侍るを打末なきやうの道は筆多くなれ
猶よろしき侍る

三番

左　持経者

海さまて神の玉いふゝとも人のおもへ(?)中の月かな
志めしのなる人にそめ織のなかえにいろ/\色かゝる

右　念仏者

あミた仏いはゝ果まて涅槃せむまて往生の月をさへさ
右をや見門を来ハ中もとの事人まかるハ右の歌 □

一　判云月ハ左歌五百番子ほどさゝけ右歌早八
雅門たちよりの数乃文句歌は勝劣定めか
かたく侍へし
意ハ左の歌詞こそ仏法をこそ頼ぐこと
いさゝかそなる花をふかく法花しくよゆるに
あそ侍らめ経をそめみといへる事物思ゆ人
志まうとうの右の歌あさのあやなる流れと
いへるに人思ひけるも君子あさとよくへくや
自由ならずして自由をとこそる也但しらぬ
雨の侍るはよき持

四番

左　遊女

河瀬よる郭さそと月はなかまさるさそ那にあまれ波のよる〳〵
くまなかりたのまゝにこそ契なき思ひさだめぬ人を恨ん

右　白拍子

秋は猶思ひ出多かる身にはあまたかへてや月のよる〳〵ものはれにとる覧
思ひ出る袖にせめて畑まれ多きぬるしといひつゝさき

判云月は秋なる三秋のあはれまさるよきよへとも右の
歌の詞さしきとていひて侍るうへ右の歌紅衣青袊
人の継来をとれのまゝ那中波上一生は浮流を

思へはしのをもちいぬるくなりにて勝負侍なり
恵はたの歌よしおもしろうてあらく侍るとも目おほれ
多分相具や侍らん右の歌あらぬのさ海歌はとるさ
言猶感動頗可為勝歟

五番

左　絵師

おもしろく八月は花もしきまさ人々にゆるされし波は花の草子さやまとゑ
く絵のさきと思ひはなれなるよかけぬたけを面影をとおもひけり

右　綾織

雲かゝるはあやしきを月にこれうつまし ものたゝかへる雲に袖ふる峯

おもひきやいつもの海をみてはかはらぬ雲にも猶ありさん

判云月ハ雲ゐの鏡にたとへたる心地し侍

何れも恋しきの波ハみとめる心ちまさると

中持し

恋此番もたゞ取ちがへたるは優なる心ならし　右ハ

ほくろなどぬ柏ふきさかえて歌めかしき事

あさましきは猶左の勝とこそ

六番

左　　銅細工

新しきかゞみのぬりのをきもちはてよゝのかたに月影ことにみがきまされ

くもりなき人の心はまかせたゞ月をうつせるかゞみなりけり

右　　蒔絵師

月影はうつせば海にさしながら浦に蒔絵とみえもこそすれ

あふことをよそに引はなち数ならぬあまたまでまたかゝる涙すれ

判云月の左右みえつゝ絹あひてかゞみよしと侍

何失は弁ぐる所を侍るまで

恋は両首共あるさは海にとりなしておもひなき

まことなき心に物くるしくもいひとりこそ侍る

かゝる事朝夕のむかしとて好るもの見て侍るまで

勿論

七番

左　　　　　　秀能

汀くまの月の光をさそふらん波をたゝみる浦のみちしほ

意ハ上の句の絵そらことなきよし思ふ風情にもとゝまりやひさうとおもし

右　　　　　　御簾編

夕浦を遠方さし見れとも月影ハ浦のおもにあらハれわたる

なかめハ思ひなかるゝをもしろく猶そのゆくをも聞しれん

判云月ハ右の光くもりなくあさやかにおもしろし

右ハ時も夕の浦にて月にことよせて物の夜なかにも猶は

あらハれあかつきの浦の上にて人のこゝろ

物とも行ありける浦にて判者ハおさおさあるを

行るらし

意ハ左の歌のことはりにいたりて猶の思ひよりをもとの詞をとし

行しも右のあともさまよひさしも行をとも

一番はあるにまかせてあり持

八番

左　　　　　　鏡麿

秋の夜ハいつよりもすゝしけれ月にあかれたる月をとりけるて

影深きことのまに草ばかりを見るにてあけわたる月を

右　　　　　　年生

なく猿の声へたつ遠山は宮居なる月よ御燈のともしをとらへて
人知れて思ふ心我ともへと嫌ひに六銭のくくりに二文それ

判云月は左の猿をとるに百餘の洞なる猿し
不献君主の不明なる言なるとりや思ひ分けなく
何遠と右なく猿の声へたてなめて月の御燈の
ともしえ事此るも先のゆへあるとてや侍らん何る
勝とや侍へし
然は右の歌詞のさく宮祉してめてたし
侍りと左歌意の所は手くこそあるへし
遠とえこそ切なる様なりて勝

九番

左　相撲

日は入て月こそ空に移りけれ独とまれひとり此夜のこして
出るとは勝へきは何そ我は負くまし月はいさよひは

右　博労

此駒の月毛の馬を引きて此駒月まて行やまそ
あへて世の人の馬をつなきつゝこゝろま馬とをき

判云月は庭星あまたとも一月の有明のとをや空
あらぬ物くる思ふまへて侍る物何のくまは
かまへてこそいへる歌をとりて是をあらんと

いかなしき奥ある人〻の持

意ハ両方の俤中〻なれはまさる詞けにと思ひ

あらそひ侍る共に其勝劣もなけれハいつれもさそて

侍るへしさるを意あらはれて侍る由持

十番

左　猿楽

たちひさく月乃前にハいそかしさもしるらしなとてそいひかけ

いかなるやまとことハさかしけにしてもおもてこそ世の［　］

右　田楽

うたかたく中門口の庭にてこゑはさらにあかきこそ月をとそ
こそ達

玉章ぞ色はかゝりてもはきゝや人徳をみ給ひ今はもや
かくと

判云 月ハ左をしるしるみてこそかくしよき右けしき

はきこそたき葉あるまては徳を見る人の侍る

意ハ左両者も明かにしらし右奥あるにと

おもしろき好きとらる所に持なるへく侍るへし

十一番

左　相人

かねてより月に行衆のきえしかぬいかにかせて雲晴よの

右　持衣

まよひをいきかあらんを人の思ふにて其かあくかるるおほかのゝ清く

面白き月みのく海に浮ぬるらず独をハ来て歌せ(?)言(?)て
あへてふハ恋の心にまかせたる海こそハらひ来るハ知らめて
判云月右ハ世の情を此みて思之右ひとれ絹(?)て
独をハ来さんとみえる事にもとまさへ伝へし
縦被(?)ほとしてまかせんハあしうら色こそさや
あきハ始終のねらならて伝きハ為勝
恋ハ右そくあるも此まうのそちうせて題の心
いそく思ひへとたハ恋の外来か今とらし
をそうつまあらんくやとうく為勝

十二番

左　樵夫
月みえ世はきハ人を送りたる山風その吹袖やまき
恋ち山ら花にいくあなかきハ出家妻ハとしこをまつ
右　漁夫
さを棹の歌も世をまなく浦さわて月のおかせにはおたふ舟人
姫あくとハ人の心被(?)いらぬるふとうそらむ
判云月ハ左歌ハ若耶渓の風のこみにあしまと
鳳凰池の月さへ思出て伝へし右方棹歌一
曲釣漁翁とト詩の心をさんぬるへしいはきせよう
しくらんえ伝うぬ為勝

意の左ハ義婦坂のさゝくもりにけりの道て推路と
もとより右の方ハ露婦娘の忠を称するを誉るよ
徳よふ皆いかにもして何意路山や名所にまさ
とさんて侍らんさらハ右の勝と申へし

判者神主

むかしの世のうたの題を詠よりけるなり今ハ神さうかうなる

神主 月永付

三十二番職人歌合

そもそも歌の道は人士女の家にとゞまらず花鳥の
なさけを詠じ山林に合せ容なる活計の媒とも
なすべきの志にあるべきなりこのみちのもとき人も
あるを此にたゞへなりかくても名月にむかひ意ある人
て歌をよみ傍ひとしきあるを見ておのれもよまま
まなこに我よ卅余人ハ尋しきことゞ意和おなし
ききのうちのをむしろよりも此名をそうけさる
ことに将来多生の限なき今たまく とめる時とき
たゆん事を此おきりて猿率の大丈夫ハ ちくさし月と